

国語科学習指導案

1 単元名 物語を読んで考えを深めよう 「海の命」 立松 和平作 (全 11 時間)

2 単元目標

- 登場人物の相互関係や心情、場面についての描写をとらえ、叙述から読み取ったことを進んで話し合おうとしている。
- 「海の命」を読んで考えたことを発表し合い、自分の考えを広げたり深めたりすることができる。
- 物語を読み、人物の生き方について考えることができる。

国語への関心・意欲・態度	読むこと
・叙述から想像して読み、読み取ったことを進んで話し合おうとしている。	・登場人物の相互関係や場面の描写から、その心情を叙述に即して想像しながら読む。 ・叙述に着目して、学習問題や主題について話し合い、自分の考えを深める。

3 ひびき合う子どもたちを目指すための指導の工夫

高学年のブロックテーマ「仲間への共感、自立する自分」

- ・仲間に共感しつつ、自分の思いも大切にする姿
- ・新しい価値観にふれ、自分を再構築する姿

研究課題 「切実な問題意識を持ち、友だちと関わり合いながら学習する子どもの育成」
・手立て…子どもの「切実な問題」をみとった単元構想と授業づくり

(1)単元と指導

①単元と教材について

本単元は、学習指導要領 5・6 年「C 読むこと」の目標「目的に応じ、内容や主旨をとらえながら読む能力を身に付けさせるとともに、読書を通して考えを広げたり深めたりしようとする態度を育てる。」を受けて設定した。また、その内容「エ 登場人物の相互関係や心情、場面についての描写をとらえ、優れた叙述について自分の考えをまとめること。」と「オ 本や文章を読んで考えたことを発表し合い、自分の考えを広げたり深めたりすること。」を指導するのに適した単元である。

本教材は、海を舞台に少年太一が憧れの大魚を追い求めることを通して成長していく様子が情景豊かに描かれている。一人の人間の成長には、周囲の人間や事物との関わりが欠かせない。その関わりを通して、自分の認識の甘さに気付いたりより崇高な道を見出したりしていくのだろう。本文の終盤にしか出てこない「海の命」という言葉には、太一を「本当の一人前」として成長させた気付きが象徴されていると考える。それこそがこの物語の中核であり、そこに主題があると考えた。

物語は、「村一番のもぐり漁師」であった太一の父が大魚であるクエに破れる場面から始まる。先祖代々この海に生まれ、育ってきた太一にとって、父や漁師という生業、そして海そのものは自分の誇りであり憧れであった。その父が大魚をとろうとして命を落とすのである。「おとうといっしょに海にでる」その願いは「あの父を破った大魚をとりたい」に変わり、いつしか「その大魚をとって本当の一人前になる」という気持ちさえ抱いていくようになる。

太一は父の死んだ瀬に一本釣りに行っている与吉じいさに弟子入りする。ここで扱われている一本釣りとは、飼いつけ漁のことを指す。これは、餌を一体にばらまき、そこに寄って来た多くの魚のうち一匹をとるという漁法である。一網打尽にしないこの漁法にこそ、与吉じいさが太一に伝えたかった漁師としての教えが刻まれている。「海で生きる」「海に帰る」という言葉にも表されるように、魚をとってこそ生きられる漁師は、海に生かされている存在なのだ。だからこそ、自然のありのままの姿を保たなければならないし、必要以上にとってはならない。魚は「海のめぐみ」であり、人はそのめぐみを分け与えられて生きているというのだ。その思いが「千匹に一匹でいいんだ。」という言葉に込められて太一に伝えられる。海への畏敬の念を教えられた太一は、そこで圧倒的な存在感を有し、誰もかなうもののいない大魚に強く惹かれ、憧れていくのも不自然なことではないだろう。青年となった太一は「村一番の漁師」と認められるほどに成長するが、同時に「大魚をとりたい」ことへの執着心は、むしろより一段と高まっていく。「おとうの死んだ瀬」に潜ることを恐れ、悲しむ母の気持ちと対比されるのは、そこを「自由な世界」と認識し、期待や興奮、膨らむ夢で胸をいっぱいにする太一の姿だ。追い求めてきた瀬の主は、もはや「まぼろしの魚」と称されるまでになる。物語が大きく動くのは、そうして願ってやまなかったそのまぼろしの魚「かもしれない」大魚と出会う場面である。

息をすることを忘れそうなくらい、太一は大魚の悠然たる姿に魅了される。静かに流れる時間の中で、太一の高まる興奮を読み取ることができるだろう。しかし、そうした大魚の姿に太一はこれまで抱いたことのなかった感情を経験する。今まで、魚がどのような気持ちで殺されているかなど思いやったこともなかったのに、その大魚は「殺されたがっている」上に「おだやかな目をしている」と感じるのだ。彼は思わずその大魚に感情移入し、そこに大いなる

命があることを感じ取る。「漁師が魚を殺すことを迷っては漁師ではない。」これは実際にもぐり漁をする漁師さんへの取材で聞いた言葉である。大魚を殺さなければ一人前どころか漁師でもないのだ。それができずにいることへの苛立ちや、目の前にある命への畏敬の念が相まって太一は泣きそうになる。もりの刃先を大魚から外した太一に浮かんだのは、「海の命」としてのその姿であった。「父もその父も、その先ずっと顔も知らない父親たちが」生まれ、育ち、帰っていった、この海の命である。先祖を生かし、自分を生かす存在としての象徴であり、またこの海に生きとし生けるもの全ての命を象徴する存在だと思えたのではないだろうか。そうした思いが「おとうここにおられたのですか。」の言葉に表れていると考えられ、また太一は「そう思うことで、大魚を殺さずに済んだ」のである。さらに、この先ずっとこの海で生きていく太一は、大魚を殺さないというその決断によって、まさに「千匹に一匹」の教えを実践したと言える。憧れる大魚をとりたいと願っていた自分の卑小さに気づき、新たな認識を得た太一は漁師として、また人として大きく成長したといえよう。ここに、作者立松和平の「人間は自然の一部として、自然の恵みによって生きている」という考えが表れており、周囲の人間や自然とのかかわりの中でそれに気付いて成長していった太一の生き方と、そこに描かれる自然と人間の在り方にこそこの物語の主題があると考えられる。

「命」といった抽象的な概念に加え、太一の心情に対する細かな説明が少ないこの物語に、子どもたちは「どうして」「なんで」と疑問を抱きながら読んでいくことだろう。物語全体をとらえながら、イメージを豊かにしていくことを通して、太一の生き方そのものとの出会いを味わえるようにしたい。それこそが本単元の意義があり、子どももまたこれからの自分の生き方を豊かにしていくことを願っている。

②指導について【子どもの「切実な問題」をみとった授業づくりについて】

○「海の命」における知的好奇心

この物語は、語り手が太一に寄り添う形で描かれている。それによって、子どももまた太一の心情に寄り添いながら読み進めていくことになるだろう。「村一番のもぐり漁師だった父」を破った「瀬の主」を、太一は何年もかけて追い求めてきたはずなのに、その瀬の主を破ることができるまさにその時に自ら「殺さない」決断をするのだ。子どもは「なんで殺さないの。」と強い疑問を抱くだろう。さらに、この重要な場面で題名である「海の命」という言葉が登場する。子どもは「題名なのにここにしか出てこない。」ことに興味関心を抱き、「海の命だと思えたから殺さなかったのか。それならこの言葉に表されているのは何だろう」と知的好奇心を高めることが考えられる。また、その疑問こそがこの物語の主題に迫ると考えられるため、『クエを殺さなかった太一の気持ちを明らかにすることを通して、「海の命」に表されているものについて考えよう』という作品全体を通す読みの問題を立てたい。この物語は、場面だけとらえてもそれを解決することはできず、物語全体をつなげて読んでいく必要がある。部分で捉えていたことが、読み進めていく中で少しずつつながり、「わかってきた」に変わったり「ではこれはどういうことだろう」と次への疑問を高めたりするところに知的好奇心がさらに引き出されることを期待する。また、そうして読んでいくことを通して「皆で話し合えないとわからない。」という思いが高まり、その問題が子どもにとって「切実な問題」として高まっていくと考える。

○抽象的な主題に迫るための読みの手だて

この物語を読んでいくためには、自他の命や海の豊かさと言った抽象的な概念をイメージできることが重要になる。またそうしたイメージを土台として、一つひとつの言葉に注目して物語全体を読んでいかなければ学習問題を解決していくことは難しい。そのため、次のような手だてをとる。

まず、「命」に対する捉えを柔軟にするために、単元を始める前に、道徳で「命」について考える時間を設ける。「命とは…」と子どもが聞かれた場合、「他にはない大切なもの」「失ったらもう戻って来ないもの」という自分の命が唯一無二の存在であるという考えが多く出てくることがこれまでの様子で考えられる。そこで、「他を生かす命」について考える時間を設け、「海の命」を読む際の手がかりとなるようにしたい。さらに、「命」についての捉えを豊かにするために、「命」に関わる様々な絵本を学級に用意し、子どもが自由に手に取れる環境を作る。

「いろいろな命があるんだな」そう思うことで、「海の命ってどんな命のお話かな」と興味が持てるようにしたい。また学級に置く絵本の中には、立松和平の作品も多く含ませておき、命に対してだけでなく、作者自身に対する興味が持てるようにする。立松和平の作品は、自然との共生をテーマにしているものが多い。「やまなし」での学習を生かし、他の作品を参考にすることで作者の考え方に気づき、子どもが「海の命」を読む際のヒントにできるようにしたい。

次に、この物語の舞台である「海」や「瀬」に対するイメージを豊かにできるよう、その情景に近い写真を掲示する。瀬とは海藻が繁り、様々な魚が集まる豊かな命の土壌と言える。大魚であるクエが生息するということは、食物連鎖の和がどこ欠けることなく完成されている証拠であり、そうした豊かな海であるからこそ、太一が憧れや夢を抱くことにつながる。海の近くに住んでいる子どもとはいえ、太一が感じたような世界観を持っているとは言えないことから、少しでもその感覚を子どもに近づけられるようにしたい。

最後に、実態にも記したように本学級の子どもは読む力に相当の差があることがわかっている。そこで、読み全体に関わる学習問題を立てた後、その問題を解決するための二つの問題について一緒に考えていく方法をとりたいと思う。それは、与吉じいさの教えの意味を考える場面と、太一のクエに対する思いを考える場面である。単元構想にも記したように、そこを読むことで子どもの学習感想に次の問題への疑問が出てくると予想した。それを全体に広げ、一緒に解決していく。そうすることで、主題に迫る上で落とせない重要な言葉に触れていくようにし、「クエを殺さなかった太一の気持ち」と「海の命に表されるもの」という問題を、それまで読んできた物語全体にある叙述を根拠にして多くの子どもが自分の読みを持てるようにしたい。

○ひびき合いと本時について

全体での発言には消極的な子どもが多い実態を踏まえて、一人読みの後、まずはペアやグループ内での意見交換の場を持つようにする。そこでの交流によって、学級の全員の子どもに対して「話す」活動と、聴いてもらう活動を保障する。さらに、自分の読みと比べる聴き方を指導し、友達の考えに自分の考えと重ねて感想が言えるようにしたい。その交流で、友達の良い考えを自分の中にも取り入れられていくと良い。

ペアやグループでの交流の後、学級全体での話し合いの場を設ける。問題に対する読みが、様々な方向からでることが考えられるが、主題に迫る上で落とせない言葉に関わる考えが出てきた際には、「それについて皆はどう読むか」と切り返すことで、話し合いを焦点化し読みを深められるようにする。グループでの交流を含め、皆との話し合いを通して、友達の考えを受け入れたり、新たな気付きを持てたりする姿を「ひびき合う姿」と考える。読みの力に差があるからこそ、単元を通して互いに支え合って学習していくそうした姿が生まれ、読みが深まっていくことを期待する。

本時では、クエを殺さなかった太一の思いを考える場面を取り上げる。まず、一人読みをすると、その根拠となる言葉として「海の命と思った」ことを取り上げる子どもがいると考えられる。また一方で、「こんな感情になったのは初めて」という太一の気持ちを取り上げる子どももいるだろう。整理をしながら「こんな感情」に込められる太一の葛藤に皆が気付けるようにしたい。その上で、もう一度「海の命と思った」所を考えることで主題に迫っていく。「大魚を獲りたい」という強い思いは、どこか独りよがりで与吉じいさの教えとは反するものであったこと、自分は海に生かされている存在であったことなどに改めて気づく太一の思いに近づくと良い。これまでの読みを網羅するだけでなく、叙述を根拠に想像を膨らませる必要がある。自分の考えを持つことが困難な子どももいるだろう。友達の考えを聞いて、自分の考えを持ち、これまでの自分の考えに広がりや深まりが持てる姿を本時での「ひびき合う姿」とし、そうした姿にこそ個の読みの高まりがあったと考えたい。

4 単元指導計画

次	時	学習活動	主な支援・留意点【評価】
一	1～3	○全文を通読する ・題名読み、全文通読、新出漢字、初発の感想、学習問題の設定 太一がクエを殺さなかった気持ちを明らかにして、「海の命」に表されるものについて考えよう ・登場人物と人物像、あらすじの確認、重要難語句の確認	・音読は、家庭学習の中で毎日行うようにする。
二	4～9	○作品を読み進め、考えを深める ・与吉じいさの教えの意味と太一への気持ちを考える ・太一のクエに対する思いを考える ・クエを殺さなかった太一の気持ちを考えよう(本時)	・登場人物の相互関係や場面の描写から、その心情を叙述に即して想像しながら読む。【読むこと】 ・叙述から想像して読み、読み取ったことを進んで話し合おうとしている【関心意欲態度】
三	10～11	○作品に対する自分の考えを深める ・「海の命」を読んで自分が考えたことを交流する。	・作品について、自分なりの考えを持つ。【読むこと】

『海の命』 単元目標

◆物語を読んで考えを深めよう

- 登場人物の相互関係や心情、場面についての描写をとらえ、優れた叙述から読み取ったことを進んで話し合おうとしている。
- 『海の命』を読んで考えたことを発表し合い、自分の考えを広げたり深めたりすることができる。
- 物語を読み、人物の生き方について考えることができる。

主題 自然に生かされている人間の在り方と、それに気づくことで成長する人の生き方。

事前指導

- * 道徳「命とは」・自分の命だけでなく他の生き物を生かすこともあるんだな。
 - 自分だけでなく他の生き物にとっても、自分の命が大切なことがあるんだな
- * 立松和平の絵本読み聞かせ。「川のいのち」「山のいのち」

他、学級文庫の充実も図る。「ヤクーバとライオン」勇気」「天とくついた島」、海を題材にした写真集など

題名読み

○「海の命」①

・海の命ってきっと魚とか海に住む生き物のことだ。・何かを表しているのかな。・読んでみたい。

全文通読

・海の命はどうやら大きなクエって魚のことみたい。・クエとはどんな魚か。・なぜクエが海の命なのか。クエは敵だったんじゃないの？ どうして太一はクエを殺さなかったのかな。・題名が「海の命」なのに最後の方に一回しか出てきてない。何を表しているのだろう。

予想することを通して、あらすじ(関係図)と登場人物、物語の設定(前話)をおさえる。ここから出てきた難語句を次で扱う。

太一がクエを殺さなかった気持ちを明らかにして、「海の命」に表されているものについて考えよう

・自分も死ぬのが怖くなった？クエが怖かった？・お母さんの反対を思い出した？・与吉じいさの教えを思い出した？・全然わからない

予想する

登場人物・重要難語句確認 ②

→前話の読み取りから太一とお父さんの人物像と場の設定をつかむ ■父もその父も、その先ずと顔も知らない父親たちが住んでいた海に、太一もまた住んでいた。海が大好き。漁師への強い憧れと、父への憧れ。少しわがまま。先祖代々この海で生きてきた。太一はその一人。

太一の気持ちを明らかにしたい！
太一・クエ・父・母・与吉じいさ

前話の読み取りで、読み方の指導を行う

■クエってどんな魚か

・実物の大きさ(2mで60kg)。映像。
・高級魚。あまり獲れない。
・岩礁やサンゴ礁にいて単独生活。
→どうやってとるの？太一や太一のお父さんはもぐり漁だった。

読みを深める

■もぐり漁

・もりを持って素潜り。自分の身体にロープを巻いて獲物を引き上げる。
→こんな大きな魚を引き上げるのは大変。息が持たない。

■一本釣り(餌付け漁)

・餌を水中にばらまき、そこに寄って来た魚のうち一匹をとる。一網打尽にはしない。
→たくさん来るのにどうして一匹しかとらないのか。面倒。与吉じいさも「千匹に一匹」って言っただ。どうして？

○与吉じいさの教え「千匹に一匹でいいんだ。～ずっとこの海で生きていけるよ。」の意味と太一への気持ちを考えよう。②

魚はとても大切、魚を守る漁業。「海で生きる」から、漁師は海がないと生きていけないからとりすぎない。必要以上には獲らない。漁師は海に生かされている存在。逆に守っていけばずっと生きていける。太一は早く一人前になりたかったから、焦らないうでしっかりそういうことを教えたかった。「村一番の漁師」というところからも太一のことを信頼している。一人前として認めている。与吉じいさの獲り方をしていればずっと生きて行けるのに、太一がクエを獲りたいのはどうしてだろう。

与吉じいさの教え・信念と太一の夢は内容が実は逆。

○太一のクエに対する思いを考えよう。②

■「無理やり与吉じいさの弟子になった。」

獲りたくて仕方がない。
自分も早く一人前になりたい。

■母の悲しみ(おとうの死んだ頼)

太一も死なれてしまおうとお母さんが
悲しんでいても構いなし。それぐらい獲りたい。
自分なら獲る自信がある。【自由な世界】

■「とうとう父の海にやってきたのだ」

わくわくしている。挑戦したい。
自分もいよいよクエを獲れる。

■「夢」

大魚に会いたい。大魚を獲ることは漁師としての夢。憧れ。

■「村一番のもぐり漁師だった父を破った」

自分も村一番になりたい。あの父も破れなかったクエを
自分が破って、本当の一人前の漁師になりたい。

■「本当の一人前の漁師」

この太魚をとってこそ一人前。
一人前になりたい。

大好きな海であの父を破った大魚を獲り、本当の一人前になりたい。それが太一の夢であり長年の強い憧れ。

・これほどまでに獲りたかったクエを殺さなかったのはなぜだろう。

○クエを殺さなかった太一の気持ちを考えよう。②

■殺されたがっている■おだやかな目

クエに見とれている。魚は今までの獲物だったのに、人みたいに感じた。怖くなった。命があるって初めて思っ殺せなくなった。クエがきれいになって思った。オーラを感じた。

葛藤

■そんな感情になったのは初めて

殺したいのに殺せない。獲物が獲れないのは漁師じゃない。自分にいらいらしている。

■本当の一人前の漁師にはなれない

夢がかなえられないことに焦っている。魚を獲れないなんて漁師じゃない。

○「大魚はこの海の命だと思えた」に込められた太一の気持ちを考えよう(本時②/②)

- 海が大好きな太一だから、このクエこそ大切にしたいって思えたんだな。(C)
- クエを獲ろうとしていたのは自分勝手な思いだと気付いたんだな。与吉じいさの教えを守ったんだな。(B)
- 豊かな海に自分は生かされている。だからこそその象徴であるクエはとってはいけないと気付いた。獲らないことで一人前になった。お父さんたちみたいにずっと海で生きていくことの決意が表れている。だから、最後に「村一番の漁師であり続けた」ってある。(A)

○「海の命」を読んで自分が考えたことを交流しよう。②

- 何年間も同じ夢を追いつける太一はすごいけど、それを止める決断をした太一もすごいと思った。それぐらい、クエの姿に感動したんだと思う。一人前になりたいなんて思ったことないけど、自分もそれぐらい強く夢が持てるといいな。
- 獲らないことで本当の一人前になるなんてことがあるんだな。自分はまだよくわからないけど、太一みたいな生き方ができたらいい。
- 太一に大切なことを教えた与吉じいさはすごいと思った。与吉じいさも太一みたいな経験をして大人になったのかな。

■大魚はこの海の命だと思えた

クエは自分を生かしている海の象徴。海にいる他の生き物全体も表している。これを守ってこそ本当の一人前。クエは獲るべきものではなくて守るもの。与吉じいさの教えそのもの。だから獲らない。

6 本時案(別紙)

7 実践を終えて

①本時までの実際の流れ

時	学習活動【皆で読んだ中心となる言葉】・子どもの反応	子どもの様子・みとり	教師の支援・手だて
1	①題名から想像する。 ②初めて読んだ感想を書く。 ・やっぱり海の命は魚のことだ。	・ほとんどの子どもが海の生き物の話であることを想像していた。 ・自分なりに主題(のようなもの)をまとめている子どもが数人いた。多くの子どもは、海の命はやっぱり魚のことだったと感想をもった。疑問が膨らむというより、浅く完結しているような様子。	・わからない言葉にマークをし、気になった言葉には線を引きながら聞くように指導をした。
2	①前時の皆の感想から、皆が持っている疑問を知る。 ・千匹に一匹ってどういう意味かな。・おとうは死んだのかな。等 ②皆で音読をしたり範読を聞いたりしてお話を楽しみながら、もう一度感想を書く。	・友達の疑問を知って、新たな疑問を持った子どもや友達の考えを聞いて改めて自分の疑問に興味を高める子どもがいた。疑問がなかった子どもも気になる点が出てきた様子。 ・疑問点は多岐にわたっていた。	・皆の疑問を座席表にして返すことで気が付かなかった疑問にも気付けるようにした。友達の疑問を取り入れてもいいし、特になければ書かなくてもよいとした。
3	①疑問が集中している所から今後の読みの見通しを持つ。 ・与吉じいさは死んだのか。・千匹に一匹の意味は何か ・太一はなぜクエを殺さなかったのか・太一はなぜクエをおとうと思ったのか・太一はなぜクエに会ったことを言わなかったのか。 ②与吉じいさの死は死んだのかについて考える ・悲しい気持ち、両手を合わせた、悟ったってあるから死んだ。 ・おとうもってあるからおとうと同じように与吉じいさも死んだ。 ・おとうは死んだの？→おとうの死について考える 飼い付け漁、もぐり漁についても知る 【ことさける】【さとる】【海に帰る】【岩のような魚】 ③学習感想を書く	・今後の読みの方向性を付けたい様子であった。これらの疑問を解決していく中で皆の疑問も解決されていくと子どもは考えていた。 ・疑問の中でも「クエをおとうと思ったのはなぜか」が明らかになれば、殺さなかった理由や海の命の意味も分かりそうだという発言が多かった。 ・「海に帰る」の表現が死を表すことを皆で出し合って理解した。	・これらを明らかにしていくことを通して、読みを深め作品を味わっていくことを確認した。 ・父の死をとらえやすくするためにもぐり漁について、同時に与吉じいさの漁についても補足説明をした。 ・【海に帰る】【岩のような魚】で読み方の指導をした。
4	①お話の設定を確認する 場所【父もその父もその先ずっと～海】、登場人物の確認 ・父がそんな高級魚であるクエをとっても自慢しないのはどうして？ →【海のめぐみだから】・海がくれたもの・命あるものを頂いている。 ②学習感想を書く	・実物大のクエに驚いていた。興味がなかった子どももここで引き付けられた様子。 ・太一がどんな海にいるかは読めたが、その海に対する太一の思い【どんな表情も好き】は読めていない様子。 ・クエが高級魚であることから、父が自慢しないのはなぜだという話題になり、父の人柄に気付く子どももいた。 (最初に挙げた疑問のうち「千匹に一匹」を次に読みたいとなる。)	・【父もその父も～】で読み方の指導をした。 ・クエが何か知りたい子どもがいたので、クエの実物大を提示。同時に、瀬についても画像を提示して補足説明。
5	①【千匹に一匹でいいんだ。～ずっとこの海で生きていけるよ。】の意味について考える。 ・魚はとりすぎちゃいけない。必要以上にとってはだめ。魚に感謝。 ②学習感想	・千匹に一匹は例えであって、それは与吉じいさの太一への教えと多くの子どもが気付いた。 ・学習感想に「無理やり弟子入りした」ことへの疑問が何人か出る。	
6	①前時に読んだことを確認する。その後感想交流。 ②「【無理やり与吉じいさに弟子入りした】のはなぜか」について考える。 ・冒頭に【おとうと一緒に～】とあるから漁師に憧れてた。父に憧れてたけど死んじゃったからせめて同じ瀬のじいさに。 ・【不意に夢は実現する】とあるから、太一はクエをとりたかった。 ③学習感想を書く	・子どものころから漁師に憧れており、おとうに対する憧れもあることを多くの子どもが読んだ。しかし、「無理やり与吉じいさに」に込められた、クエに対する強い願い・憧れは読めていない様子。せめて同じ海で漁をする人の近くにいくことで父に近づきたいと読む子どもが多かった。一方でまだよくわからない子どももいた。 ・太一の夢と言う言葉が出てきたが、それが何かはわかかならないとなった。次時への学習問題となる。	・前時のことがわかっていない子どものために振り返りをした。 ・座席表の中で、弟子入りした太一の気持ちについて疑問を持った子どもの意見を皆に広げ、問いかけた。
7	①前時に読んだことを確認する。 ②太一はどんな夢を持っていたのかを考える。 【不意に夢は～】【おとうといっしょに～】【無理やり与吉じいさに～】 ・本当の一人前になったかった。・とりたかった。・会いたかっただけ。とるきはない。・父のかたきをとりたいかった。・父を越えたかった。 ③学習感想を書く	・太一の夢についていろいろな考えが出た。読みの内容にかなりの差がある子どもも迷っていた。 ・話し合ってもう一度もった自分の考えを座席表にして、再度太一の夢について話し合いたいという意見が出た。	・前時のことがわかっていない子どものために振り返りをした。 ・一人読みが難しい子どもは、個別に指導し、自分なりの考えがもてるようにした。
8	①太一の夢について考える 【まぼろしの魚】【村一番の～父を破った】【とらなければ本当の一人前の～】 ・本当の一人前になったかった。・とりたかった。・会いたかっただけ。とるきはない。・父のかたきをとりたいかった。・父を越えたかった。いや父に追いつきたかった。 ②学習感想を書く	・クエに対する憎しみの気持ちはないとする子どもがほとんどであったが、それだけではクエをとろうとする根拠が薄すぎると納得がいかない子どももいた。話し合いは広がったまま終わったため、多くの子どもが迷ったままだった。 ・太一の夢について自分なりの考えがある子ども、なぜとらなかつたのが等先のことが気になっている子ども、そもそも太一はクエをとろうとしていたのかどうかかわからない子どもなど、疑問がバラバラ。	
9	①自分の問題をじっくり解決する。 (少人数での読み合い。一人読み等) ②学習感想を書く ・みんなのを聞きすぎてもっとごちゃごちゃしてきた。 ・整理したい。	・太一の夢はなんだったのか、なぜクエをとらなかつたのか、「こんな感情」とはなにか、なぜ泣いたのか、なぜ海の命と思ったのか、お話の終盤に差し掛かってきてさらに疑問が増え、「ごちゃごちゃしてきた。」との声がたくさんあがった。 ・次はこのごちゃごちゃをみんなで出し合って解決したいと決まった。	・「まずは自分でじっくり読みたい」と言う子どもの思いを大切にすることにした。疑問がある子どもは個人的に話し合ってもよいとした。
10	①みんなのごちゃごちゃを整理する ②太一に夢について整理しよう 【海のどんな表情も好き】海が相当好き…これまでの読みに追加	・皆の疑問を整理したところ「こんな感情」に対する思いがたくさん集まり、それを次は読みたいとなった。 ・太一の夢について整理をすることで、「漁師への憧れと、瀬の主をとりたいという強い思い」についてはどの子どもも理解できた様子。	・たくさんある疑問をカードに書いて子どもが分類することで、今後の読みに見通しを持てるようにする。

②本時での様子

本時案(別紙)に記したように、本時では太一が抱いた「こんな感情」について話し合うことを学習問題とした。それは、前時までのある子どもの発言を機に、多くの子どもがその時最も考えたいとしていたことであり、教師もまた主題に迫っていくために皆で話し合うべき重要な問題であると考えたからである。

本学級は読みの力にかなりの差がある。そのことを考慮し、本時のねらいはクエを獲りたかったのに獲れないとがく、太一の葛藤に気付くこととした。さらに、子どもの力に応じて葛藤の根拠にも気付けるよう、その部分に迫る本時を計画した。結果、多くの子どもは授業の前半部分において太一の葛藤には気付くことができたが、その根拠については皆が納得するには至らず、曖昧なままに終わってしまった。原因として次のようなことが挙げられる。

まず一つ目は、学習問題の分析である。子どもは、「こんな感情」を考える際に、文章中の様々な所を根拠にしていた。教師がねらっていた読み方でもあったのだが、太一の感情に皆で迫っていくためには「こんな」がどこを指すのか、文法的な部分をはっきりさせる必要があったのである。「こんな」について皆で確認していくことで、根拠が様々な所から出される広がった話し合いの状態から、自ずと「永遠にここにいられるような気さえした」太一の感情について考えていくことができる。そして、それについて考えを持っていた数人の子どもの発言をきっかけに焦点化が図れたと考える。そこが、子どもが本時で立ち止まって考えるポイントであった。本時での学習問題の決定に安堵し、その分析が足りなかったことは私自身の今後の課題である。

二つ目は、葛藤の根拠が一目でわかる板書の工夫である。話し合いを焦点化していく際に、これまで出ていた意見を元に、太一の葛藤とその根拠になる部分が、子どもの目にぱっと入る板書が理想的であった。事前に想定していなかったわけではないのに、それが叶わなかった原因は、本時のねらいに対する教師の迷いであると考えられる。力の差を考慮して、少なくとも太一の葛藤には気付いてほしいと願う一方で、話し合いとしては葛藤の根拠に迫ってほしいと考えていたことが板書計画への迷いを生んだ。学習問題の分析から引き続いて自身の課題としたい。

話し合いは「こんな感情」について、「クエを見とれているような、初めての感情。」「クエに対する尊敬」や「やすらぎや優しさ」と言った意見が出て、それについて皆はどう考えるかと投げかけていた所で終わってしまった。鐘が鳴って「ここで、今日は終わりです。」と私が言ったとき、子どもから出た「えーっ。」の声は「もっと友達の考えを聴きたい。考えたい。」といった思いの表れだろう。考えても話し合っても、すぐには道が開けないこの物語に、子どもはかなり苦戦しながら読み深めてきた。普段なら、すぐに諦めてしまうところだが、そうはならなかったところは一つ一つ丁寧に読み深めてきた本単元の成果の一つと言えるかもしれない。本時におけるそうした姿からも、この学習問題が子どもにとって切実な問題であったと考えたい。次時は、本時で最後に出た意見について考えるところから始まり、徐々に主題へと迫っていった。

③単元を通した成果と課題

最後に、本単元を通した成果と課題について振り返る。

【成果】

1) 子どもの理解度に合わせた授業計画と単元構想

子どもの読みの力にかなりの差があったことを踏まえて、毎回の授業前にその時間に気付いてほしいことを三段階くらいの幅を持たせて想定するようにした。そうすることで、これまでよりも焦らずに授業を進めることができた。また、子どもの思考が単元構想とずれてしまっても、主題に迫るのに必要不可欠な叙述をはっきりさせておいたことで、落ち着いて修整し直すことができたことも成果の一つとして挙げたい。

2) 他の考えを受け入れて自分の読みを深める、ひびきあう姿

「実際の流れ」にも記したように、子どもの中には冒頭より自分なりの主題のようなものをまとめている子どもも数人おり、その中には他の意見を欲していない子どもも見受けられた。そうした子どもが、単元の後半に差し掛かってきた時、物語の本質的な部分に目を向け「どうしてもわからないから、皆と話し合いたい。」と感想を書くようになった。「わかった気になっていた」自分に気付き、友達と学習する意義を得て理解を深めたり、友達の考えを受け止めて、自分の読みを深め、さらに新たな問題に気付いたりして読み深めるその姿は、ひびきあって学ぶ姿と言えるのではないかと思う。

【課題】

1) 学習問題の分析と話し合いの焦点化

上にも記したように、学習問題の分析によって話し合いをどう焦点化していくか決まることが今回改めてわかった。学習問題の設定に気をもめるのが正直なところであるが、その分析も怠ってはならないのである。今後の課題としたい。

2) 読む力の差を踏まえた授業づくり

読む力に差があることは当然のことであり、それを生かしながら、支え合って授業を進めていくことが理想であると考えている。ただ、現実には時間的な制約もあり理解の早い子どもの考えに流されてしまうことも多く、個々の多様な考えを引き出すにはまだまだ至っていない。成果にも挙げた部分もあるが、より柔軟で個が生きる授業づくりを目指していきたい。